

こわれゆく世界の中で

2007(平成19)年3月15日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督・脚本・製作＝アンソニー・ミンゲラ／出演＝ジュード・ロウ／ジュリエット・ピノシュ／ロビン・ライト・ペン／マーティン・フリーマン／レイ・ウィンストン／ヴェラ・ファーミガ／ラフィ・ガヴロン／ポピー・ロジャース (プエナ ビスタ インターナショナル (ジャパン) 配給／2006年イギリス映画／119分)

……『イングリッシュ・ペイシエント』と『コールドマウンテン』のアンソニー・ミンゲラ監督が、「禁断の愛」「魂の純愛」に続いて、「真実の愛」を描いたのがこの映画。舞台がロンドンのキングス・クロスの再開発地区というのがおもしろい。都市再生のためには古いものを壊さなければならないのと同じように、愛の再生と真実の愛の発見のためには、古い愛を壊さなければならないのかも……？ ジュード・ロウ扮する建築家の主人公が2人の女性との間の愛に揺れるが、彼女たちはいずれも子持ちの母親。そしてそれは、アンソニー・ミンゲラ監督があえてそのように設定したものだ。不安定で複雑な大人たちの愛の姿をじっくりと……。

🎬 「禁断の愛」「魂の純愛」「真実の愛」

私が映画評論を書こうというきっかけになったのは、1997(平成9)年1月に『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)を観て感動し、はじめて映画のパンフレットを購入した時から。それは『シネマルーム I』の「私の映画へのスタンス」に詳しく紹介しているとおり。その『イングリッシュ・ペイシエント』のアンソニー・ミンゲラ監督が、ニコール・キッドマンとジュード・ロウを主演させた『コールドマウンテン』(03年)も、ポロポロと涙を流しながら観た私の大好きな映画(『シネマルーム 4』139頁参照)。この2つのすばらしい愛の感動作について、プレスシートでは『イングリッシュ・ペイシエント』を“禁断の愛”、

そして『コールドマウンテン』を“魂の純愛”と表現している。そして何とも意味シンな邦題の『こわれゆく世界の中で』は、“真実の愛”。さあ、真実の愛を求めてどんな男女が登場し、愛の葛藤をくり広げていくのだろうか……？

再びジュード・ロウが主役だが……

アンソニー・ミンゲラ監督は、今回も『コールドマウンテン』に続いてジュード・ロウを主役に起用した。ジュード・ロウ扮するイギリス人建築家のウィル・フランシスは、サンディ・ホフマン（マーティン・フリーマン）と共に大規模なキングス・クロスの都市開発プロジェクトを担うグリーンエフェクト社の責任者だが、今回のウィルの愛の形はきわめて不安定……。

まずウィルは、スウェーデン系アメリカ人でドキュメンタリー映像作家のリヴ（ロビン・ライト・ペン）と10年以上同棲生活を続けているが、2人は未だ結婚していないという不安定な関係。そのうえ、13歳になるリヴの一人娘のビー（ポピー・ロジャース）は体操を習っている少女だが、夜中でも体操の練習をして眠らないというから、この3人家族（？）はきわめて不安定……。

他方この映画の主軸となる物語は、祖国ボスニアから亡命し、今はキングス・クロスにある共同住宅の一室で仕立屋として生計を立てている未亡人アミラ（ジュリエット・ピノシュ）とウィルとの愛の行方だが、15歳になるアミラの一人息子ミロ（ラフィ・ガヴロン）は、ウィルの事務所を荒らした窃盗団の1人だから、話がややこしくなるのは当然……。このように、この映画はそのタイトルどおり、最初の設定から愛の行方が不安定……。

古いまちの解体と都市再生は……？

私は弁護士として都市問題をライフワークとしているが、そのきっかけは、1984年の大阪駅前問題研究会への参加。大阪市を施行者とする、都市再開発法にもとづく市街地再開発事業で生まれた大阪駅前第2ビル内の商売人たちが、通行人の少なさと水光熱費の高さに悲鳴をあげたのは一体なぜ……？　そういう問題意識から出発し、都市再開発法の構造的な問題点、欠陥をあぶり出していったわけだ。時あたかも、中曽根アーバン・ルネッサンスが始まる時代。そして、レーガ

ン、サッチャー、中曽根による新保守主義の流れが世界を席捲し、都市開発が大きな注目を浴びることになった。

イギリスでのその象徴はドッグランドの再開発だったが、1988年のヨーロッパへの都市問題視察旅行で、私はその規模の大きさにビックリした。また、ドイツやフランスにおける再開発の現場を歩き回り、その法的システムについても必死に勉強したもの。そんな体験をし、現在は「破綻する再開発」というテーマで各地の再開発事件の相談を受けている私としては、この映画に登場するイギリスのキングス・クロスの再開発は興味深いもの。

これは、従来貧困層の多い商業地区であったキングス・クロスを、鉄道・地下鉄の交差するターミナル駅としてさらに発展させるため大規模な再開発を行うものだが、その功罪は……？ この映画では、キングス・クロス地区の負の部分として、①ボスニアから逃れてきたアミラたち貧困層が住むまち、②アミラの息子ミロたち窃盗団が暗躍するまち、そして③窃盗犯人を自ら捕まえようとするウィルに近づいてくる売春婦オアーナ（ヴェラ・ファーミガ）のような女がたくさん存在するまち、というイメージで表現されているが、その真の都市再生のためには何が必要……？

この映画における、ウィルと彼をめぐる2人の女性との愛が真に再生するためには、1度過去の姿をさらけ出しぶっ壊さなければならなかったが、キングス・クロスの再生のためにも、やはり古いまちの解体が必要……？ 2008年のオリンピック開催を控えて、今北京では新しいまちづくりのため、胡同^{フートン}の解体を含む古いまちの解体が急ピッチで進んでいるが、それってホントに都市再生につながるの……？

ウィルのオフィス移転が問題の始まり……？

ここ数年、東京都心部はその姿を大きく変えてきたが、それは小泉内閣における都市再生緊急整備措置法による法的制度の支援が大きいというえ、景気の回復、株価の回復、そして地価の回復という社会・経済情勢に支えられたもの。品川駅は既に超高層ビルが林立する地区になっているし、東京駅も丸の内側の再開発に続いて、今度は八重洲側も大変貌。さらに、今日3月16日、ホリエモンこと堀江貴

文に対して懲役2年6カ月の実刑判決が言渡されたが、ライブドアが入居していた赤坂六本木の六本木ヒルズは成功者の象徴とされていたもの。

キングス・クロスも、この品川駅や東京駅そして赤坂六本木と同じように再開発による都市の再生が期待された地区だが、まだ再開発の緒についたばかりで古いまちが存在している間に、ウィルが性急にオフィスをその地区に移転してしまったのが問題の始まり……？ 窃盗団が暗躍し、売春婦が夜な夜なたむろしているキングス・クロス地区に、立派なオフィスを完成させその披露パーティーを大々的にやれば、彼らの絶好の標的とされることなど、上流階級に属するウィルは、想像すらできなかったのだろうが……？

ウィルがアミラに惹かれていった理由は……？

この映画は、アンソニー・ミンゲラ監督が“禁断の愛”と“魂の純愛”に続いて“真実の愛”を描いたものだから、ウィルとアミラそしてウィルとリヴの愛の姿がポイント。またこの映画が興味深いのは、アミラは15歳の息子ミロを、リヴは13歳の娘ビーを抱えているところ。したがって、彼女らはウィルに対しては女であるとともに、子供に対する関係では母親……。この映画の中で、アミラが語る「あなたは女っていうものを知らないのね。母親は子供を守るためなら何だってやってのけるものなのよ」のセリフはこの映画最大のポイントだから、それを十分味わいながら鑑賞したいもの。

ただ、私が少し納得できないのは、なぜウィルがアミラに惹かれていったのかということ。リヴと娘ビーとの関係に悩むウィルが偶然見かけたのが、息子ミロと楽しげに遊ぶアミラの姿だったが、これがウィルがアミラに惹かれたきっかけ。しかし、それだけのきっかけで仕立屋をやっているアミラの家になわぎ服の手直しを頼みにいったり、スーツを仕立ててもらったりするだろうか……？ また、その過程の中でウィルがアミラに惹かれていき、遂に肉体関係にまで及んだというウィルの気持が、私にはイマイチ理解できないところ……。もちろん、アミラを演ずるジュリエット・ピノシュはすばらしい女優だが、この映画におけるアミラは、それほど女としての魅力を備えた存在ではないのだから……。

■ 誤解が誤解を、そして説明不足が……？

愛が壊れていくのは、本当にお互いの気持が失われたためというケースもあるが、誤解にもとづくケースも多いはず。そして人間の気持は複雑だから、ひょっとして私の亭主は浮気しているのでは？ と疑うことがあっても、それをストレートに質問することはありえない。したがって、さまざまな心理的葛藤を経た挙げ句、その疑問が表面に出てくる時は既に暴風雨状態になっていることが多いのでは……？ また、1つの誤解が生じると、それに関連してあそこでも誤解が、ここでも誤解が生じ、お互いの気持が疑心暗鬼になることが多いはず……？

そこで大切なのが「説明」だが、国会議員はもとより、多くの企業と同様、男女の愛の関係でも、この説明責任を果たさず、悪い結果が明らかになった後に、「説明不足」を謝罪することが多いのでは……？ そんな誤解と説明不足が、ウィルとアミラの間でも、そしてウィルとリヴの間でも……。

■ やはり情報公開と透明性が大切……

東京都知事選挙の行方は、事実上石原慎太郎現知事と浅野史郎候補との対決に絞られたが、浅野氏や北川正恭元三重県知事ら「改革派知事」の最大の売りは、情報公開と透明性。四男の延啓氏を都の文化振興事業「トーキョーワンダーサイト」(TWS) に関与させた問題や、公費から飲食費を支出していた問題でケチをつけられた石原氏は、その説明が不十分だったところを改善すると約束しているが、さて情報公開と透明性というテーマのために知事のクビをすげ替える必要があるのか否かは、あなたの判断次第……？

それはともかく、この映画で“真実の愛”を描くため、アンソニー・ミンゲラ監督は、ウィルと息子持ちのアミラ、ウィルと娘持ちのリヴという複雑な愛の形を登場させており、愛の再生のためには、とりわけこの情報公開と透明性がポイントになる……？ といっても冒頭に書いたように、ウィルとリヴは10年間も一緒に生活しながら結婚していない関係だし、ウィルとアミラは息子の窃盗事件をきっかけに知り合いとなり、愛を深めていっただけの不安定な関係。そして、一時的な「二股かけ」はありえても、本来ウィルが2人との愛を両立させること

が不可能なことは明らか。したがって、この映画ではウィルが、どの段階でどのように情報公開と透明性を徹底させるのかが興味的。都知事選挙の行方を見守りながら、その2つの視点からウィルとアミラ、ウィルとリヴの姿をウォッチングしてみれば面白いのでは……？

キングス・クロスにも「YAMAKASI」が……

私が自転車で大阪市内を走り回っていてよく見かけるのが、スケボーに乗って道路上や公園内で練習をくり返している若者たちの姿。時々、現実にもこれを使って移動している姿も……。これは、キングス・クロスの悪ガキたちも、リュック・ベッソン監督が原案・脚本を書いた『YAMAKASI』（01年）を観て、あんなことができたらと憧れているため……？

「YAMAKASI」とはあるグループの名称で、コンゴのリンガラ語で超人という意味だが、その蝶のような身軽で鮮やかな身のこなしはホントに超人的……。

15歳になるアミラの息子ミロが友人たちと共に日々励んでいるのは、そんな「YAMAKASI」のようにビルの屋上から屋上へ飛び移っていく練習。したがって、そんな窃盗団が、新しくキングス・クロスにオープンしたウィルの立派な事務所にターゲットを定めたのは当然。彼らの侵入口は屋根。ガラス張りの屋根の一部から下を覗き込み、誰もいなくなったところでガラスを割って侵入し、警報を切れば、あとはやりたい放題。こんな窃盗団に目をつけられたら、もうお手上げ。そこで、ウィルがとった対抗手段は……？

第3の女（？）は売春婦……

警察は当てにならないとばかりに、ウィルが夜な夜なオフィスの近くで見張りを続けたのは、犯人を逮捕したいという思いの他、もう1つ、リヴと娘ビーとの言い争いが絶えない家にいたくないという気持。わかる、わかる、そんな気持……？

もっともそんな孤独な見張りの中、客引きに立つ売春婦のオアーナと仲良くなったのはいただけない……。この売春婦のセリフはハチャメチャなところもあるが、それなりに合理性と説得力のあるセリフが多いから、あまり邪険にせず、きちんと耳を傾ける必要がある。さすがに上流階級に属する建築士だけに、ウィル

は売春婦の勧誘には乗らなかったものの、飲み物を差し入れてもらったり、話し相手になったりしていると、それが有料かそれとも無料かは微妙なところ……？ また、そんなことをくり返していれば、家に戻ると彼のスーツには香水の香りがプンプンと……。さらに、彼女が大好きなCDをカーステレオに入れて聴いたりしたから、彼の車の中には、娘は知っているもウィルなど到底知らないはずのCDが残っていたりするから、それが新たな疑惑の対象に……。こんな様子を見ると、ひょっとして売春婦のオアーナはウィルにとって第3の女性に……？

まとめ方のポイントは……？

ウィルとアミラが仲良くなり、男と女の関係になり、愛しあったのは真実の愛、それとも窃盗犯のミロが絡んだもの……？ それは、ミロの逮捕によって次第に明らかになっていくはず……。そして、アミラに惹かれていくウィルの姿を見て、再度ウィルとの愛の関係を確認せざるをえなくなったリヴはどんな決断を……？

このようにそれぞれの愛の形の確認を迫られるようになったのは、ミロが窃盗犯としてブルーノ刑事（レイ・ウィンストン）らの手によって逮捕され、その処罰をめぐってウィルがどう対応するかが迫られることになったため。すなわち、もともとウィルは窃盗犯逮捕のために1人車の中で見張っていたわけだが、犯人がアミラの息子であることがわかることによって、自分が窃盗の被害者としてどう対応するかを対外的に明らかにせざるをえなくなったわけだ。しかしそうすると、情報公開と透明性の視点からは、当然ウィルとアミラの「不適切な関係」が表面に出るから、さてウィルはどんな選択を……？ それが表面に出れば、これまで10年間続いてきたウィルとリヴとの愛の形にも変化が現れるのは当たり前。

「お願い、何とか息子を助けて」と母親の姿を全面に押し出してくるアミラに対して、ウィルはどのように答えるのだろうか……？ そして、ミロの処分をめぐる刑事裁判、あるいは調停事件の中、ウィルとアミラや息子ミロとの関係、そしてウィルとリヴや娘ビーとの関係はどのように壊され、また再生されていくのだろうか……？ それは映画を観てのお楽しみだが、そのポイントがミロの処罰に対する、ウィルの対応にあることだけはしっかりと確認しておこう……。

2007(平成19)年3月16日記